

# 育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性

荒木 美幸<sup>1)</sup>・大石 和代<sup>1)</sup>・岩木 宏子<sup>1)</sup>・渡辺 鈴子<sup>2)</sup>・池田 早苗<sup>3)</sup>・達田志津子<sup>4)</sup>・小川由美子<sup>5)</sup>

**要旨** 育児期にある226名の母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとについて調査し、低ストレス群と高ストレス群でのソーシャルサポートの違いを分析した。サポート提供者については、ストレスの程度に関わらず主に「夫」と「実母」から心理的・手段的サポートを受けており、今後もこれらのサポートを望んでいた。サポート提供者数及び種類についてはストレスの程度で差はみられなかった。専門職からのサポート状況については、両群とも「医師」や「保母」から心理的サポートを受けており、さまざまな専門職種からの心理的・手段的サポートを望んでいた。その中で「保母」からの心理的サポートを受けている母親は低ストレス群に多く、「保健婦」からの心理的サポートを希望する母親は高ストレス群の母親に多くなっていた。

長崎大医療技短大紀 14(1): 89-95, 2001

**Key Words** : 心理的サポート, 手段的サポート, ソーシャルサポート, 育児ストレス

## はじめに

少子社会が続く中、母親が子供に注意を向ける時間的な余裕はあるが、子供の数が少なく、まして核家族化によって地域社会における連帯が希薄になり、育児場面に遭遇したことのない母親が増加するにつれて、育児が母親にとってより孤独で不安なものへと変化している。このような状況の中、乳幼児をもつ母親にとって夫、実母、義母、兄弟などの「家族」や友人のみならず、保育園、子育てサークル、ベビーシッターなどの「地域社会の資源」からのさまざまなソーシャルサポート（以下、ソーシャルサポートをサポートと略す）は、育児を行う上で重要な役割を果たしている。前回の調査<sup>1)</sup>で職業の有無にかかわらず育児期の母親はさまざまな専門職からのサポートを望んでいることがわかった。そこで今回は育児期にある母親に対するサポートを育児ストレスとの関連から調査し、地域における育児支援のあり方について検討した。

## 対象と方法

対象は、平成11年5月に長崎市内の2ヶ所の保健センターで1歳6ヶ月健康診査を受ける幼児の母親290名である。事前に対象者に自記式アンケート調査表を郵送し、自宅にて記入後、健康診査時に回収した。調査項目は①対象の属性、②母親が現在受けているサポートと今後希望するサポート、③育児ストレスの程度である。

②については、サポートに関する他の研究<sup>2), 3), 4), 5)</sup>を参

考に心理的サポートと手段的サポートという2側面から調査した。心理的サポートとは、「子育てをする上で相談ののってくれる人」、手段的サポートとは、「母親本人の具合が悪くて誰かの手を借りたい時、すぐ駆けつけてくれる人」と定義し、現在誰からサポートを受け、今後誰からサポートを受けたいかを夫や実母、兄弟などの近親者や友人、職場の人、また保母、医療者、子育てサークルのメンバー、ベビーシッターなど23種類の人物の中から選択し、複数回答してもらった。なお、正確なサポート提供者の人数を把握するために兄弟や友人など、それぞれに複数人物のサポート提供者が存在する場合にはその人数を記入してもらった。したがって、「サポート提供者数」とは現在のサポート提供者の人数を、「サポート提供者の種類」とは23種類のサポート提供者を示した。

③については、加藤<sup>2)</sup>らが考案した育児ストレス尺度を用いた。これは、育児に対する肯定的な態度や身体状況の8項目と育児に対する否定的な態度や身体状況の10項目との合計18項目からなる。各項目に対して、「よくあてはまる（1点）～全然あてはまらない（5点）」と得点化し、逆転項目については得点修正した。最高90点、最低18点で得点が高い程高ストレス、低い程低ストレスを示す。なお、統計処理は、低ストレス群と高ストレス群の2群間でt検定及びカイ二乗検定（2×2表のます目の期待度数の中に5以下のものがある場合はイエーツの補正をした）を行った。

- 1) 長崎大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻
- 2) 長崎市役所地域保健推進課
- 3) 長崎市中央保健センター
- 4) 長崎市北保健センター
- 5) 長崎大学医学部附属病院

結 果

1. 回収率

アンケート調査回収率は健康診査対象290名中、健康診査を受けた239名(82%)で有効回答数は226名であった。

2. 対象の属性

母親の平均年齢は31歳であり、年代別にみると30~34才が81名(36%)と最も多く、次に25~29才が69名(31%)と続いていた。子供の数は1人が99名(44%)と最も多く、次に2人が87名(39%)であった。家族形態については核家族が169名(75%)、拡大家族が57名(25%)で、現在の就業状況については、有職の母親は63名(28%)、無職の母親は163名(72%)だった。里帰り分娩の有無については里帰り有りが138名(61%)、里帰り無しが88名(39%)だった。夫婦の出身県については、夫婦とも県内が174名(77%)、本人県内で夫県外16名(7%)、本人県外で夫県内21名(9%)、夫婦とも県外は15名(7%)であった。日中の子どもの世話を主にしている人については、本人が170名(75%)、実母は6名(3%)、義母は4名(1.5%)、保母は45名(20%)、その他は1名(0.4%)だった。

母親の育児ストレス得点の分布を示したものが図1である。ストレス得点は18点から65点までの間に分布しており、ほぼ正規分布であった。最頻値は33点(15名)、平均点は40.2点であった。育児ストレス得点の低い方から高い順に並べクォータイルで分類を行い、得点の低い群を低ストレス群、高い方を高ストレス群とした。同得点者を同じ群に分類したため、低ストレス群は18点から33点までの63名(平均29.6点)、高ストレス群は47点から65点までの61名(平均52.3点)となった。

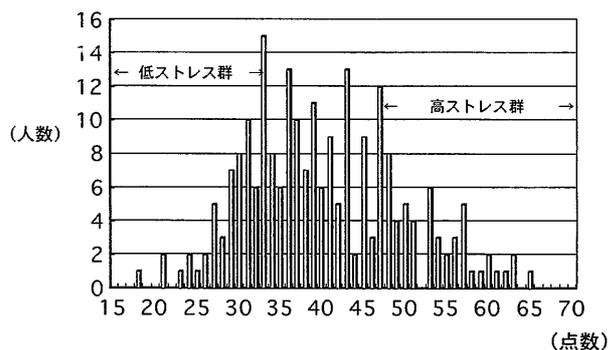


図1 育児ストレス得点の分布

以下、低ストレス群と高ストレス群について比較検討を行った。対象の属性については両群間で特徴的な傾向はみられなかった(表1)。

3. 育児ストレス尺度(18項目)の回答結果(表2)

育児ストレス尺度の18項目で「よくあてはまる」、「大体あてはまる」と回答した母親の割合を示した。肯定的項目と否定的項目について分け、それぞれ低ストレス群

と高ストレス群とで比較した。育児ストレス尺度18項目中17項目については両群に有意差がみられた( $p < 0.05$   $p < 0.01$   $p < 0.001$ )。唯一両群で有意差がなかった項目は、「子供が生まれてよかった」であった。

肯定的項目については、「子供が生まれてよかった」「子供と一緒にいると楽しい」は低ストレス群は2項目とも100.0%、高ストレス群はそれぞれ96.7%、83.6%だった。次に、「自分から子供をあやしたり、遊んであげなくなる」は、低ストレス群では98.4%と大多数であったのに対し、高ストレス群は52.5%と約半数であった。「子供と気持ちが通いあっているように思う」「これからの育児が楽しみである」「育児によって自分も成長しているように思う」は低ストレス群では3項目とも96.8%、高ストレス群はそれぞれ86.9%、77.0%、67.2%だった。「子供は自分の生きがいである」は低ストレス群は79.4%、高ストレス群は54.1%、「朝、目覚めがさわやかである」は低ストレス群は60.3%、高ストレス群は14.8%と2割にも満たなかった。

一方否定的項目については、「子供がわずらわしいことがある」「ちょっとしたことで子供をしかる」「子供をしかる時、たたいたり、つねったりする」「なんとなくイライラする」は低ストレス群は4項目ともわずか3.2%であるのに対し、高ストレス群はそれぞれ、57.4%、57.4%、52.5%、65.6%と過半数以上であった。また「子供のことでよくよ考える」「毎日同じことの繰り返しで息がつまるような気がする」「自分ひとりで子供を育てているように思う」は低ストレス群は3項目とも4.8%

表1 対象者の属性

事項	全数 n=226	低ストレス群 n=63	高ストレス群 n=61	
母親の年齢	20~24歳	23 (10)	3 (5)	6 (10)
	25~29歳	69 (31)	24 (38)	16 (26)
	30~34歳	81 (36)	24 (38)	23 (38)
	35~39歳	38 (17)	7 (11)	14 (23)
	40歳以上	14 (5)	5 (8)	2 (3)
子供の数	1人	99 (44)	32 (51)	24 (39)
	2人	87 (39)	20 (32)	27 (44)
	3人	36 (16)	9 (14)	10 (16)
	4人	3 (1)	1 (1.5)	—
	5人	1 (0.4)	1 (1.5)	—
家族形態	核家族	169 (75)	43 (68)	44 (72)
	拡大家族	57 (25)	20 (32)	17 (28)
就業状況	有職	63 (28)	20 (32)	18 (30)
	無職	163 (72)	42 (68)	43 (70)
里帰りの有無	有	138 (61)	38 (60)	40 (66)
	無	88 (39)	25 (40)	21 (34)
夫婦の出身県	夫婦とも県内	174 (77)	53 (84)	41 (67)
	本人県内、夫県外	16 (7)	2 (3)	4 (7)
	本人県外、夫県内	21 (9)	6 (10)	9 (15)
	夫婦とも県外	15 (7)	2 (3)	7 (11)
日中の子供の世話	本人	170 (75)	44 (70)	45 (74)
	実母	6 (3)	1 (1)	2 (3)
	義母	4 (1.5)	2 (3)	2 (3)
	保母	45 (20)	16 (25)	12 (19)
	その他	1 (0.4)	—	—

( )内は%

表2 育児ストレス尺度（18項目）の回答結果

育児ストレスに関する項目	全数 n=226	低ストレス群 n=63	高ストレス群 n=61	カイ二乗検定 (p)
<b>(肯定的項目)</b>				
子供と気持ちが通いあっているように思う。	212 (93.8)	61 (96.8)	53 (86.9)	*
子供が生まれてよかった。	224 (99.1)	63 (100.0)	59 (96.7)	NS
これからの育児が楽しみである。	208 (92.0)	61 (96.8)	47 (77.0)	**
子供と一緒にいると楽しい。	215 (95.1)	63 (100.0)	51 (83.6)	**
育児によって自分も成長していると思う。	185 (81.9)	61 (96.8)	41 (67.2)	***
子供は自分の生きがいである。	158 (70.0)	50 (79.4)	33 (54.1)	**
自分から子供をあやしたり、遊んであげたくなる。	182 (80.5)	62 (98.4)	32 (52.5)	***
朝、目覚めがさわやかである。	87 (38.5)	38 (60.3)	9 (14.8)	***
<b>(否定的項目)</b>				
子供のことでよくよ考える。	50 (22.1)	3 (4.8)	27 (44.3)	***
子供がわずらわしいことがある。	51 (22.6)	2 (3.2)	35 (57.4)	***
時間を子供にとられて視野が狭くなる。	52 (23.0)	9 (14.3)	34 (55.8)	***
毎日同じことの繰り返しで息がつまるような気がする。	43 (19.0)	3 (4.8)	31 (50.8)	***
育児のために自分は我慢ばかりしていると思う。	39 (17.3)	4 (6.3)	25 (41.0)	***
自分ひとりで子供を育てているように思う。	40 (17.7)	3 (4.8)	24 (39.3)	***
ちょっとしたことで子供をしかる。	57 (25.2)	2 (3.2)	35 (57.4)	***
子供をしかる時、たたいたり、つねったりする。	56 (24.8)	2 (3.2)	32 (52.5)	***
育児につまずくと自分をせめる。	56 (24.8)	12 (19.0)	27 (44.3)	***
なんとなくイライラする。	60 (26.5)	2 (3.2)	40 (65.6)	***

( )内は% \*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001

であるのに対し、高ストレス群はそれぞれ、44.3%、50.8%、39.3%であった。「育児のために自分は我慢ばかりしていると思う」は低ストレス群は6.3%、高ストレス群は41.0%、「時間を子供にとられて視野が狭くなる」は低ストレス群は14.3%、高ストレス群は55.8%、「育児につまずくと自分をせめる」は低ストレス群は19.0%、高ストレス群は44.3%だった。

4. 心理的サポート提供者上位5種類 (図2, 3)

母親が現在もっている心理的サポート提供者上位5種類については、低ストレス群は実母が58名(92%)、夫が55名(87%)、姉妹が39名(61%)、友人38名(60%)、義母28名(44%)だった。高ストレス群は実母が49名(80%)、夫47名(77%)、友人36名(59%)、姉妹35名(57%)、義母24名(39%)だった。上位5種類の心理的サポート提供者については、低ストレス群と高ストレス群とは同様の提供者であり、有意差はみられなかった。

今後希望する心理的サポート提供者の上位5種類については、低ストレス群は実母50名(79%)、夫48名(76%)、姉妹35名(55%)、友人33名(52%)、義母26名(41%)、高ストレス群は夫45名(74%)、実母44名(72%)、友人35名(57%)、姉妹29名(46%)、義母22名(36%)だった。希望する心理的サポート提供者についても両群の間に有意差はみられなかった。

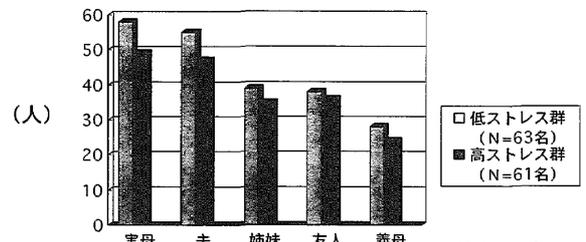


図2 心理的サポート提供者上位5種類

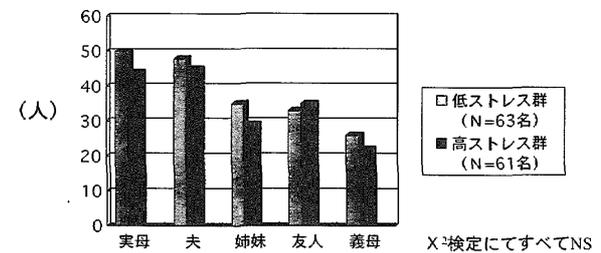


図3 今後希望する心理的サポート提供者上位5種類

5. 手段的サポート提供者上位5種類 (図4, 5)

母親が現在もっている手段的サポート提供者の5種類については、低ストレス群は実母46名(73%)、夫44名(70%)、義母29名(46%)、姉妹27名(42%)、実父11名(17%)、高ストレス群は実母36名(59%)、夫34名(56%)、姉妹24名(39%)、義母21名(34%)、実父13名(21%)だった。上位5種類の手段的サポート提供者につ

いても、低ストレス群と高ストレス群とでは同様の提供者であり、有意差はみられなかった。

今後希望する手段的サポート提供者の上位5種類については、低ストレス群は夫46名(73%)、実母45名(71%)、姉妹28名(44%)、義母26名(41%)、近所の人15名(23%)、高ストレス群は実母47名(77%)、夫45名(73%)、義母27名(44%)、姉妹20名(33%)、近所の人13名(21%)だった。希望する手段的サポート提供者についても、両群の間に有意差はみられなかった。

心理的サポートについては両群とも誰かにサポートを受けていたが、手段的サポートについては高ストレス群の母親4名が誰からもサポートを受けていなかった。

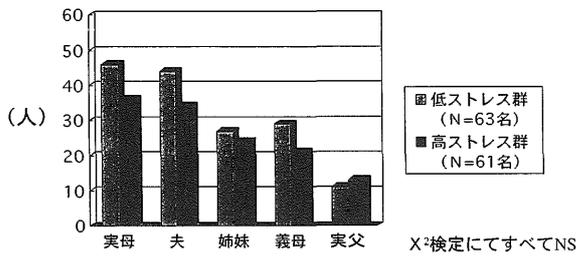


図4 手段的サポート提供者上位5種類

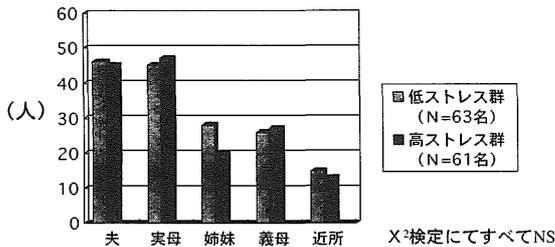


図5 今後希望する手段的サポート提供者上位5種類

6. サポート提供者数および種類 (表3)

a) サポート提供者数

現在もっている心理的サポート提供者数は低ストレス群の母親は平均7.7人、高ストレス群の母親が7.2人であった。手段的サポート提供者数は低ストレス群の母親は平均3.4人、高ストレス群の母親が3.3人であった。いずれのサポートも低ストレス群の母親のほうが高ストレス群の母親よりも平均人数は多かったが、t検定にて有意差はなかった。

b) サポート提供者の種類

現在もっている心理的サポート提供者の種類は低ストレス群は平均4.8、高ストレス群は4.4で、希望する心理的サポート提供者の種類は低ストレス群は平均4.8、高ストレス群は4.7であった。現在もっている手段的サポート提供者の種類は低ストレス群は平均3.1、高ストレス群は2.7で、希望する手段的サポート提供者の種類は低ストレス群は平均3.4、高ストレス群は平均3.5であった。

いずれも低ストレス群と高ストレス群とでサポート提供者数、及びサポートの種類・希望者数に有意な差はみられなかった。

表3 サポートの提供者数及びサポート提供者の種類

サポート	全数 n=226	低ストレス群 n=63	高ストレス群 n=61
心理的サポート提供者数 (人)	7.3(±5.4)	7.8(±5.7)	7.2(±6.8)
手段的サポート提供者数 (人)	3.3(±2.2)	3.4(±2.0)	3.3(±2.0)
心理的サポート提供者の種類	4.5(±2.2)	4.8(±2.1)	4.4(±2.5)
心理的サポート提供者の種類 (希望)	4.7(±2.9)	4.8(±2.7)	4.7(±2.8)
手段的サポート提供者の種類	2.9(±1.6)	3.1(±1.4)	2.7(±1.6)
手段的サポート提供者の種類 (希望)	3.5(±2.3)	3.4(±1.9)	3.5(±2.2)

( ) 内はSD t検定にてすべてNS

7. 心理的サポートを提供する専門職の内訳 (図6, 7)

23種類のサポート提供者の中で医師、看護婦、保健婦、助産婦などの医療者やカウンセラーそして保母、託児施設スタッフ、ベビーシッターなどの育児の専門家を「専門職」とし、専門職からのサポートの状況を育児ストレス別でみた。

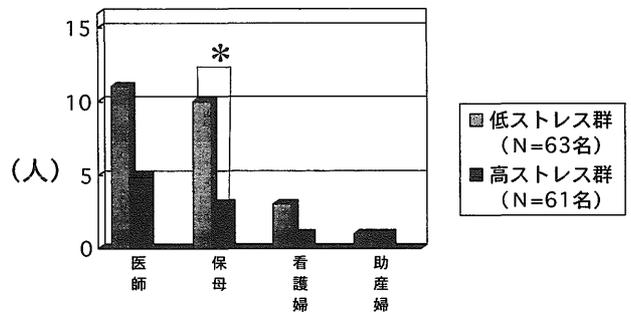


図6 心理的サポートを提供する専門職の内訳 \*p<0.05

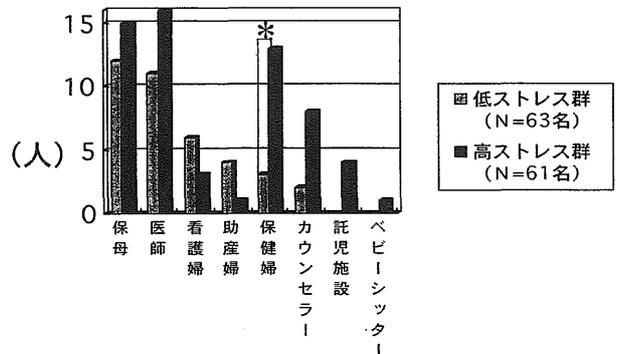


図7 今後希望する専門職による心理的サポート提供者の内訳 \*p<0.01

心理的サポートの内訳を育児ストレス別でみると、63名の低ストレス群の母親が現在もっているサポート提供者の種類では、医師と回答した母親の人数は11名、保母としたものは10名、看護婦としたものは3名、助産婦としたものは1名だった。一方、61名の高ストレス群の母親が現在もっているサポート提供者の種類は、医師と答えた母親は5名、保母3名、助産婦、看護婦がそれぞれ1名であった。低ストレス群の母親が現在もっている心理的サポート提供者は「医師」と「保母」であり、高ストレス群の母親も同様であったが、1割に満たない数だった。

低ストレス群と高ストレス群とで、サポート提供者に違いがあるか比べた結果、「保母」については、低スト

レス群のほうが高ストレス群に比べ、現在心理的サポートを受けている割合が高かった。(p<0.05)

次に低ストレス群の母親が今後希望するサポート提供者は、保母を希望したものが12名、医師11名、看護婦6名、助産婦4名、保健婦3名、カウンセラーとしたものは2名だった。高ストレス群の母親が今後希望するサポート提供者として医師を希望したものの16名、保母15名、保健婦13名、カウンセラー8名、託児施設4名、看護婦3名、助産婦、ベビーシッターはそれぞれ1名ずつの母親が希望していた。つまりストレスの程度に関わらず、保母や医療者、カウンセラーなどさまざまな職種からの心理的サポートを希望していた。また「保健婦」に心理的サポートを希望する母親は、低ストレス群に比べ高ストレス群の母親が多かった。(P<0.01)

#### 8・手段的サポートを提供する専門職の内訳(図8)

両群とも専門職から手段的サポートを受けている母親はいなかった。今後希望する専門職による手段的サポート提供者では、低ストレス群の母親の4名がベビーシッターを希望し、以下託児施設のスタッフ3名、保母、医師、保健婦、看護婦がそれぞれ1名と続いていた。一方高ストレス群の母親については、9名がベビーシッターを希望し、託児施設のスタッフ7名、保健婦2名、保母、看護婦、カウンセラーはそれぞれ1名と続いていた。今後希望する専門職による手段的サポートについては両群で有意差はみられなかった。

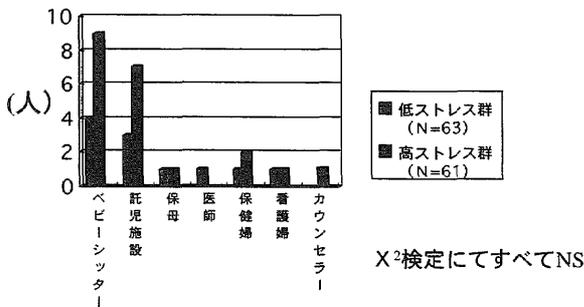


図8 今後希望する専門職による手段的サポート提供者の内訳

#### 考 察

育児ストレス尺度(18項目)で「あてはまる」、「大体あてはまる」と回答した母親について、低ストレス群と高ストレス群とでその割合を比較した。その結果、肯定的項目については8項目中7項目は、低ストレス群が高ストレス群に比べて割合が高く、否定的項目については、10項目全てにおいて低ストレス群が高ストレス群に比べ割合が低かった。この中で肯定的項目である「子供が生まれてよかった」という1項目のみは両群に差はみられなかった。つまりストレスの程度に関わらず、子供の誕生についてはほとんどの母親が肯定的に捉えているということがわかった。

また、低ストレス群の母親は肯定的項目の中の7項目については7割以上の母親が「あてはまる」「大体あてはまる」と回答し、否定的項目については10項目すべてにおいて2割以下であった。一方、高ストレス群の母親は肯定的項目の中の4項目については7割以上が「あてはまる」「大体あてはまる」と回答し、否定的項目については4~6割であった。このことから、低ストレス群の母親については育児全般に対して低ストレス状態であるといえるものの、高ストレス群の母親は一樣にストレスばかりを感じているのではなく、育児に対して肯定的に受けとめる部分もあわせもっていた。加藤<sup>9)</sup>が述べているように母親の育児に対するアンビバレントな状態が伺えた。

次に、母親に対する現在のサポートと今後希望するサポート提供者について育児ストレス別で調査した結果、両群とも7割以上の母親が夫と実母から心理的サポートを受けており、今後もこれらのサポートを望んでいた。一方、手段的サポートについては低ストレス群の母親は7割以上、高ストレス群では約6割の母親が夫と実母からサポートを受けており、今後もこれらのサポートを望んでいた。つまりストレスの程度に関わらず、夫と実母が母親にとって身近で、最も重要なネットワーク構成員であることが再認識された<sup>6),7),8),9)</sup>。

また両群とも実母、夫、姉妹からは心理的・手段的サポートを受けているのに対し、「友人」からは、心理的サポートは6割ほどの母親が受けているが、手段的サポートは1割程度の母親しか受けていなかった。本アンケートでは、手段的サポートの定義を「母親本人の具合が悪くて誰かの手を借りたい時、すぐ駆けつけてくれる人」と定義したため、母親の住居との距離が近く、容易に依頼しやすい近親者からの手段的サポートが多くなったと考えられる。一方、心理的サポートは電話でも容易に受けることが可能であり、「友人」からも心理的サポートを受けやすいと判断された。

また育児期の母親が主に受けている心理的・手段的サポート提供者は近親者であり、ストレスの程度によって、上位のサポート提供者は変わりなかった。高ストレス群の母親の中には、手段的サポートが誰もいないと答えた母親が4名いた。4名中3名は母親が県外出身者であり、また4名中2名は託児施設、ベビーシッターからの手段的サポートを希望していた。母親が具合が悪い時すぐ駆けつけてくれる人つまり、近くにいる信頼関係があり気軽に呼べる人が全くいないというのはストレスの一因になるだろう。少なくともそのようなサポートを受けることができない母親には地域の支援システム作りや専門家の支援を考慮する必要があると思われる。

育児期にある母親に対する現在のサポート提供者数及びサポート提供者の種類について調査した結果、低ストレス群と高ストレス群とではサポートの数及びサポートの種類にほとんど差はみられなかった。金沢<sup>10)</sup>は「ソ-

シャルサポートは悪影響も及ぼす。例えば、援助が誤解されたり非効果的であったり、慰めて欲しくない時に慰められたりアドバイスが不適切であったり、周囲の人がストレスやストレス反応を強化したり余計なおせっかいであったりすることがしばしば見られる。」と言っている。サポートの人数や種類（ネットワークの数）はたとえ少なくとも、その人にとって十分なサポートが受けられているか否かが大切である。質つまり人間関係の内容やその人間関係がその人にとってもつ意味や価値がソーシャル・サポートにおいては重要でないかと考えられる。質的な差については、今後の検討課題であると言える。

専門職からのサポート状況を育児ストレス別でみたところ、母親は主に医師、保母から心理的サポートを受けていた。またいろいろな職種からの心理的・手段的サポートを望んでいた。「保母」については、低ストレス群の母親のほうが高ストレス群に比べ、多くの心理的サポートを受けていた。低ストレス群のうち保育園に通わせている母親の半数は心理的サポートを受けていた。しかしながら、高ストレス群については保育園に通わせている母親の2割程度しか心理的サポートを受けていなかった。育児の心理的サポートとしては、保育園を地域へ開放するだけでなく、「保母」と気軽に話し合えるような環境作りや「保母」や保母にかわる専門職がカウンセリング技術を積めるような研修制度をつくるなどして、地域ぐるみで母親をサポートしていく必要があると思われる。

今後は「保健婦」に相談にのってもらいたいと考えている母親が高ストレス群に多かった。つまり調査対象者がこれから1歳6ヶ月健康診査を受ける幼児の母親であり、健康診査において心理的なサポートを「保健婦」に期待していると考えられた。手段的サポートについては、両ストレス群とも専門職からサポートを受けている母親はいなかったが、さまざまな職種からの手段的サポートを希望していた。

今回のアンケート調査では、自由記述の枠を設けなかったが、母親の中には「高齢出産のため、親も入院中で自分が具合が悪くなった時は、お金を出せば昼間はベビーシッターに頼めるが夜間が預ける場所がなく不安」、「再就職を希望し、面接などを受けるが、子供の病気の時休むんですか？と聞かれなかなか職がみつからない」などの記載もあった。

現在どのような育児支援が受けられるかという情報を提供することも専門職である我々の重要な役割ではないかと考えられる。

また当研究結果からも核家族が75%であり、またこどもの数は1人か2人が8割以上と、核家族化・少子化がすすんでおり、夫や実母からの心理的サポートのみならず専門家からの心理的サポートが要求されていることも判明した。育児ストレスの程度に関わらず、母親は心理的・手段的サポートいずれもベビーシッター・託児施設

のスタッフ・看護婦・助産婦・カウンセラーなど専門職からの支援を希望していた。よって、今後はこのような専門職からのサポートが得られるような広範囲なネットワーク作りが必要と思われる。

## 結 論

育児期の母親は育児専門職からのサポートを望んでいて、このニーズを満たすべく、母親の育児支援ネットワーク作りを検討する必要がある。

## 文 献

1. 荒木美幸, 大石和代, 岩木宏子, 渡辺鈴子, 池田早苗, 達田志津子, 小川由美子: 育児期にあるソーシャルサポートの実態—有職の母親と無職の母親との比較—長崎大医療技短大紀13: 127-132, 1999.
2. 加藤道代, 津田千鶴: 宮城県大和町における0歳児をもつ母親の育児ストレスに関わる要因の検討, 小児保健研究, 3: 433-440, 1998.
3. Norbeck J.S, 野島佐由美訳: ソーシャルサポートを測定する測定用具の開発過程, 看護研究, 17: 1-9, 1984.
4. 野村幸子: 母親の育児不安にソーシャルサポートの与える影響, 第28回小児看護集録, 157-160, 1997.
5. 亀山美津子: 育児支援ネットワーク, 家庭教育研究所紀要, 20: 87-91, 1998.
6. 新道幸恵, 松岡恵, 平澤美恵子, 佐々木和子, 内藤洋子, 熊沢美奈好: 妊婦に対するソーシャルサポートとその関連性について, 第8回日本助産学会学術集會集録, 43, 1993.
7. 吉田孝子, 野地有子, 木下昌代, 小山公代: 4ヶ月児の母親が持つソーシャルサポートと持ちたいと望んでいるソーシャルサポート, 公衆衛生学会抄録集, 549, 1996.
8. 飯田三貴子, 飯田知子, 宮中文子: 産後1ヶ月の間に母親が受けた家族と専門職による子育て支援の実態, 京母衛誌, 7: 34-35, 1999.
9. 瓢風須美子, 大月恵里子, 加藤尚美, 川崎佳代子, 小堂弘子, 深沢睦, 松尾邦江, 宮原守子: 産褥期におけるサポートの実態と家事・育児サポートに関する要因, 第4回日本助産学会学術集會集録, 62-63, 1996.
10. 金沢吉展: 第7章ストレスとストレス・マネジメント, 医療心理学入門 医療の場における心理臨床家の役割, 誠信書房, 182, 1995.

Association between social support to mothers  
in the nursing stage and stress

Miyuki ARAKI<sup>1</sup>, Kazuyo OH'ISHI<sup>1</sup>, Hiroko IWAKI<sup>1</sup>, Reiko WATANABE<sup>2</sup>  
Sanae IKEDA<sup>3</sup>, Shizuko TATUTA<sup>4</sup>, and Yumiko OGAWA<sup>5</sup>

- 1 Department of Midwifery, School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University
- 2 Community Health Promotion Division, Health and Welfare Department, City of Nagasaki
- 3 Central Public Health Center, City of Nagasaki
- 4 North Public Health Center, City of Nagasaki
- 5 Department of Occupational Therapy, Nagasaki University Hospital

**Abstract** We investigated the association between social support to mothers in the nursing stage and stress. The mothers received psychological and practical support from their husbands and their own mothers irrespective of the degree of stress, and also hoped for continuation of this support in the future. The number of support providers and types of support did not differ according to the degree of stress. Concerning the state of support from specialists, both the high-stress and low-stress groups had psychological support from "physicians" and "nurses" and hoped for psychological/practical support from specialists in various fields. The number of mothers receiving psychological support from "nurse" was higher in the low-stress group, and the number of mothers who hope for psychological support from "public health nurses" was higher in the high stress group.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 14(1): 89-95, 2001